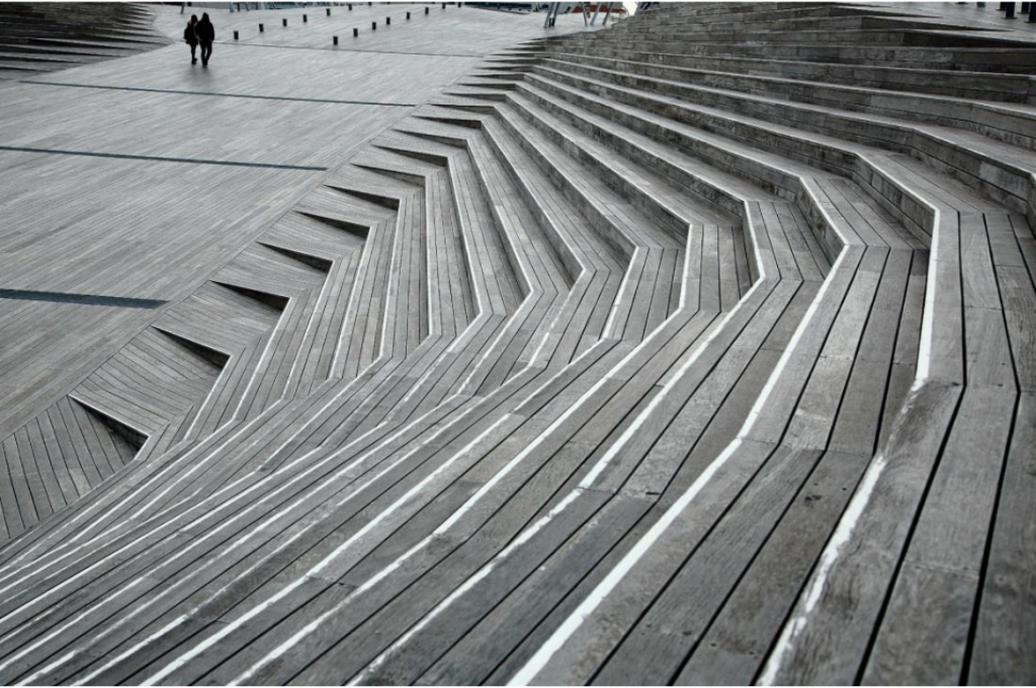


十人十色のフォトストーリー

Alt-Focus GRAPH



2015年12月 第7号

あの受講生に会いたい

取材・撮影を担当するのも受講生。毎号、多くの受講生の中からおひとりづつ、ご自身の楽しい写真ライフについてお話をうかがいます。

Vol.7 神代 奈保子さん

Profile Nahoko Koushiro



2010年1月にアルトフォーカスに参加。第3回アルトフォーカスコンテスト最優秀作品賞を受賞。受講生作品展では3年連続で組写真に取り組んでいる。幼稚園～高校まで絵画教室、現在は生花も楽しむ。

— アルトフォーカス参加のきっかけは？

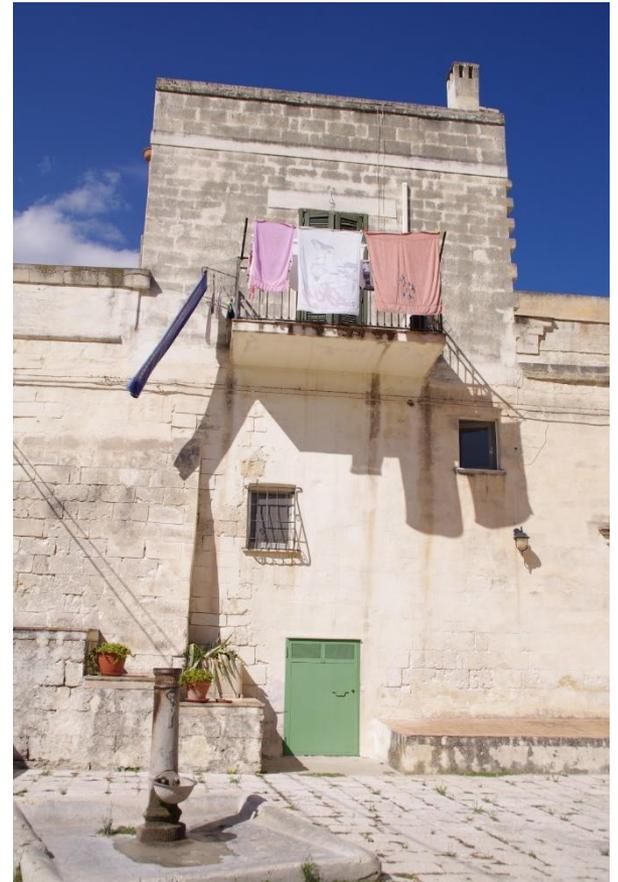
神代 一眼レフを買ったきっかけは、旅先で外国の方に写真を撮ってもらったのですが、返してもらう時にコンパクトデジカメを落として壊されちゃって。じゃあ一眼レフを買おうかなと。ところが一眼レフを初めて買ったもののあまりにも操作方法が解らなくて。それで2010年1月、アルトフォーカスの「はじめての一眼レフ」講座に参加しました。

カメラを壊されたのがきっかけ！という衝撃のお話からインタビューがスタート。ショックな出来事もステップアップにしてしまう姿勢に、何事にも明るく前向きな神代さんのお人柄が伺えます。

素敵な被写体を探し出すその感性

— 写真を拝見すると、私達が気付かずに通り過ぎてしまいそうな被写体を見落とさずに、素敵な感性で捉えていらっしゃるなあと憧れてしまいます。どんなことを考えながら被写体を探しているのですか？

神代 あまり考えてないんです。キョロキョロしつつ、何か楽しいものないかな？と無心な感じで歩いていることが多くて。「今日はこれを絶対撮るぞ！」というのはあまり無く、目に止まったものを撮っているスタイルです。色のきれいなものが好きなので、そういうのは目に止まりやすいですね。旅先だったら街並みの風景が好きなので、「路地があれば必ず覗く・そこに犬が来るのを待つ・電車が来るまで待てる」というのはあります。メインストリートに繋がっている路地は大体覗き、変な人が居なさそうな所を選んで入ってみたりよくしています。今まで撮り歩きしてきて、イタリアやポルトガルのレトロな雰囲気やフランスなどのヨーロッパの街並みが割と好きですね。



イタリアの街中を散歩しながら…

被写体を見つけるきっかけは、あっ！たまたま！でも、そこからの試行錯誤がすごい

— 撮り歩きと言いながらも一か所にいることも結構あるんですね？

神代 はい。自分の中で「この被写体好き！面白い！」と思ったものをバシバシと何枚も、縦も横も撮ったり、自分がちょっと動いて撮ったり。見上げた

り、下から撮ったり。しつこくいろんな方向から撮ります。家に帰ってその日一日撮ったものを見ると、自分が「あ！いいな！」と思ったものについては同じような写真がダダダダとあって。その中でどれにしようかなみたいな。

—他の人とは違うものを撮りたいという意識はありますか？

神代 そういうものを見つけられたらいいなとは思いますが。他の人が気付かないものを見つけられたらちょっと楽しくなるというか。今日はいいものを見つけられたなと思います。それって撮りに行ったから必ず出会えるものでもないです。あっ！と思ったらすごい勢いでそこに走り寄り、ひたすら撮ってる。

「あ！見つけた」というワクワク感が伝わってきて、見ている方も楽しくなる。それが神代さんの写真の魅力の一つですね。

神代 あんまり「人物を撮りたい、風景を撮りたい」とかそこまで絞らずに撮っています。以前、紅葉

にハマってた時があったのですが、あまりに固執すぎて、気付いたら同じようなものばかり撮ってた。そうすると「他にもっと面白いものがあったのかもしれない」ともったいない気がしたので。

組写真への取り組み

—受講生作品展では、〈影〉〈緑〉〈イルミネーション〉と、3回連続で組写真にされていますね？

神代 撮った時期も場所も違うので大変でした。いつも作品展の前になると、今年は何を出そうかと迷いに迷って、今迄に撮った写真をひたすら見返して、何かいい組み合わせはないかなと探します。気が狂いそうになるんですけど(笑)、毎回そういう感じです。

—1枚1枚が素敵なのですが、組写真だからこそ更に魅力増になっていますね。どの様にして組写真にするのですか？

神代 去年の〈緑〉シリーズの組写真の場合は、写真を見返してたまたま緑が結構多いなと思って。同じ様

な緑を組み合わせたらどうなるかなって。その前の年が形に着目した〈影〉シリーズだったので、今度は色で揃えてみても面白いかなど。たまたま同じ時期に撮っていたので割と揃っていいかなと出してみました。

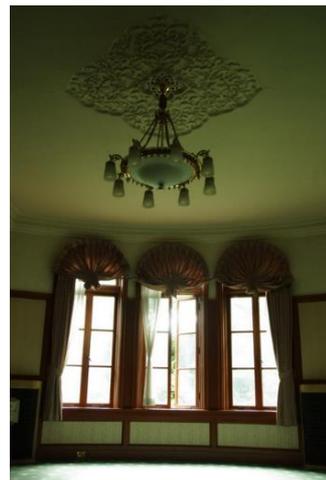
—5枚組むのは難しいですよね？

神代 テーマを決めても、大体いつも5枚に届かないで、後から慌てて撮りに行くこともあります。ほんとに、これにするかあれにするかと提出期限の最後の最後まで悩みます。

—5枚選んだ後の順番は？

神代 順番がまた大変です。プリントアウトした5枚をいろいろ並び替えて。縦横が混ざると並べた時にバランスが悪いと思うのですが、いつもそんなに上手い具合にいかないの。去年の〈緑〉シリーズの組写真の場合は、1枚だけ横だったのですが他になくて。暗い感じの写真が2枚ある場合は、間に明るめの緑の写真を入れて余り暗くならないようにと、考えました。

組写真 「新緑の季節」



作品展に寄せて

— 受講生作品展ではどんな刺激がありますか？

神代 自分だったら絶対撮らないと思う写真がすごい沢山あります。こういう組み合わせ方もあるんだとか。写真だけ見るんじゃなくて、写真を撮るまでの経緯や何でこれを撮ろうと思ったのか、といった話を実際にその場でご本人から聞けるのが一番刺激的だと思います。私も組写真に挑戦したのは、他の生徒さんでやっている方がいらして、いつか自分も、と思ったのがきっかけなので。

— 作品を見せるようになって変化はありましたか？

神代 天龍寺の写真「タイムスリップ」を出品した時は、「合成したの？」と聞かれたり、出品を最後まで迷って出したものを、「この中で一番良いよ」と言われたりして。意外だなと思ったりすることが多くて。

〈緑〉シリーズの室内からの写真も、窓を開けた先が真っ白に飛んでいたのが出すのを迷ったのですが、意外にあれが一番反応良くて。出してみたらいろんな反応がもらえるので楽しいです。

— 写真ってどういうところが楽しいですか？

神代 限られたスペースで切り取るところ。色を変えたりして、見た通りでない描写にできるのが面白いと思います。



— 次にチャレンジしたいものは？

神代 〈緑〉シリーズの組写真を出そうと思った時も、前の年は全くそれに引っかかってなかったんです。全然目にも止まらなかったのに、急になぜか緑が気になったりしたので面白いなど。その時の自分の気持ちで、見たいものや気になるものが変わるんだなと思って。今撮りたいものは何でしょう？直感でガッツとってしまうタイプなので。違う色のパターンを撮りたいとかはありますけど。後、見てて面白い写真があれば。見つけたいな。

神代さんへメッセージ

お勤めをしてから十数年、生け花も続けていらっしゃるとのこと。「同じ花材なのに、創作的な人・自然な形を利用している人。花器の形も様々。色々なスタイルで生けているのが面白い。」と。色彩や形を捉える感性が、そういうところから繋がって写真に生かされているのですね。次回の作品展が楽しみです。

取材・文＝山田祥子 撮影＝岸田恵利子



「タイムスリップ」アルトフォーカスグラフ創刊号表紙写真、第3回アルトフォーカスフォトコンテスト最優秀作品

季節のノート

～なかくぼくにこのフォト&ショートエッセイ Vol.3～



白い朝

幼かった日の ある冬の朝
家族のだれよりも早く目を覚ますと
部屋は なにやらいつもとは違う光におおわれて
浸みこむような静けさの中にありました

ふとんを抜け出し、雨戸をそっと開けると
夜半に積もった雪が 朝陽に白く輝いて
目もくらむような明るさと美しさです

夢中で庭に飛び出して行って
その冷たさと柔らかな感触を肌で感じ
きゅっきゅつ という自らの足音に耳を澄ます
湿った木々の香りを胸いっぱい吸い込み
真新しい雪を そっと口に含んでみる

見慣れた風景を真っ白に染め上げるだけでなく
五感に働きかけ
心の風景までぬりかえてしまう・・・
雪にはそんな力があるようです

この冬も
ワクワクするような白い朝が訪れますように

写真・文= なかくぼくにこ

2008年よりアルトフォーカスに参加。

2016年1月15日～1月19日 GALLERY niw にて なかくぼくにこ写真展 今そこに在るということ -sense of wonder- 開催予定 <http://gallery-niw.blogspot.jp/>

講師・秋野深に聞く

ウズベキスタンへの想い 写真家として 一個人として



世界遺産・富岡製糸場での「ウズベキスタン展」にて、世界遺産4都市の建築写真と、シルク工場の写真を展示

こんにちは、受講生の山本です。

昨年はタシケントの国際フォトビエンナーレに招待作家として参加、この12月に世界遺産の富岡製糸場で開催される「ウズベキスタン展」で展示や講演・・・と、先生とウズベキスタンの絆がさらに強まっているように思います。その魅力、今後の活動を通して伝えたいことなどをうかがいました。

— 富岡製糸場での「ウズベキスタン展」への参加は、どのような経緯で実現したのでしょうか？

秋野 この企画展では富岡製糸場で「シルクで栄えた文化」「世界遺産」という共通点のあるウズベキスタンを紹介するというので、ウズベキスタン大使館経由で富岡製糸場から写真展や講演のお話をいただきました。

— 会場も世界遺産の建築物内だったり、これまでとはかなり趣の違う形になりそうですね。

秋野 はい、世界遺産の建物内での展示は初めてです。薄暗いレンガ造りの建物内で写真にスポットライトを当て作品が浮かび上がるような展示方法も楽しみです。

日本では体験できない歴史や文化の複雑さ

— 多くの人にとってウズベキスタンはベールに包まれた国と思います。

秋野 私が最初にウズベキスタンに行ったのは1999年で、会社員時代のバックパッカー旅行でした。それまでは、どうにかコミュニケーションが取れる英語圏の国に行っていました、さて言葉が通じないところに行ってみようかと思ひまして。そういえば、子供の頃NHKの「シルクロード」で見たウズベキスタンに行ってみたかったな・・・と思ひ出したのがきっかけです。

— あの番組ではシルクロード起点の中国から終点のヨーロッパまでを紹介していましたが、あえて「ウズベキスタン」だったのは？

秋野 ユーラシア大陸のちょうど真ん中あたりで、多民族が混在している複雑さや歴史の混沌さが記憶に残っていました。あちこちから領土や治権を奪い奪われ、日本とは全く違う。まあ、最初はそういう表面的な興味というところですね。

— 十分「深い」興味と思いますが・・・。表面的というのは「青いタイルがきれい」とか、「見たこともない建物」とかそういうイメージです（笑）。つまりはそういうエキゾチックな世界遺産の背景にあるものにまで、最初から強く興味をひかれてた・・・ということですね。

今でも続けている写真のプレゼント

— 初・ウズベキスタンはいかがでしたか？

秋野 はい、現地の人たちとの出会いもあり、ぜひまた訪れたいと思いました。実は一眼レフを買って最初に行った海外がウズベキスタンだったんです。やはりそのときの体験がとても強烈で、体験を形にできる写真と執筆に心血注いでいけたらどんなにいいだろうと思うようになりました。

— その後すぐ再訪されたのでしょうか？

秋野 いえ、1999年に行って2回目が2006年です。他のイスラム圏の文化や人への興味も広がったので、その間はイランやシリアや中国のウイグルなどに行ったりしました。同じところに時間をおいて行くのは楽しいですね。最初に会った人の成長や町の変化など、1回目とは違う視点で見ることができまので。そのとき、1回目に出会ったファミリーにも再会しました。驚いたことに、最初に私が送った記念写真を家にずっと飾ってくれていたんです。その後も行く度に彼らを訪ねていますし、町で子どもたちを撮ったら、次に行くに必ず写真を渡すということはずっと続けています。



初めて訪れた1999年から交流が続くブハラの子ジ族一家（左）とヒヴァのウズベク族一家（右）



偶然見かけた掲示板が次のご縁に

——写真家としてはどのように広げていかれたのでしょうか？

秋野 2006年にサマルカンドの博物館で、掲示板に「来年2007年にサマルカンド市の生誕2750周年イベントを開催するので、サマルカンドを紹介した記事や作品などを集めています・・・」という案内を偶然見つけたんです。当時、雑誌に掲載された作品やWeb配信した旅のエッセイがありましたので、メールをしてみたら、運営側から「すぐ会いましょう」と翌日返信があったんです。そのまま2750周年生誕イベント「サマルカンディアナ2750」での写真展示が決定し、さらに2008年同じ会場で個展をさせていただきました。

——すごい展開ですね。

秋野 はい、その後、ヒヴァという西部の世界遺産の街ではまた新しい出会いがありました。ヒヴァで撮影中に、博物館で撮影を担当している写真家に声をかけられました。その方は今から100年以上前の古写真をデジタル化する作業をしており、貴重な写真をいろいろ見せてくれたんです。そのうえ、その

相当貴重な写真データを私にくださったんです。せっかくなので何かできることないかと考え、現地の人に聞き込みをしながら、古写真と同じ場所で比較写真を撮ったり、調べたりしています。これからこの活動は続けていこうと思います。

世界中の写真家との刺激的な出会い

——そして昨年の子ジ国際フォトビエンナーレですが、現地での反応はいかがでしたか？

秋野 世界35か国から集まった写真家が展示をしていた中で、他の国の写真家は人物を含めた作品が多かったからか、水や氷を被写体とした自分の作品は「他とはちょっと違う」と見られたようでした。それに、普段日本ではダイレクトにはあまりされないような質問もされまして・・・（苦笑）

——気になります（笑）

秋野 新聞記者から「まず、あなたの写真哲学を教えてください」と（笑）。もちろん意識していることはいろいろありますが、整理して話す機会は日本ではあまりないですから。「オリジナリティは何か」を厳し

く問われる。「あなたの視点はどこにあるか」ということをですね、しかも言葉で説得力をもって語れないといけない。

——たしかに日本では「言葉」よりも「感じよう」という意識が強いように思います。

秋野 あとは、国内外の写真家との交流が大変刺激になりました。普段自分が撮らない被写体やジャンルの作品も多かったのですが、それぞれ自分の表現したいものを死にもの狂いで突き詰めているさまを目の当たりにして、自分ももっと研ぎ澄まさないといけないと痛感しました。自分が刺激を受けたと同時に、相手からも刺激を受けたと言ってもらえたときはうれしかったですね。

——評価を得られたという実感は他にもありましたか？

秋野 会場で自分の写真がポスターにレイアウトされ入り口に大きく飾られたり、全体パンフレットへの掲載作品に、自分の作品を選んでいただけたりしたことは、大いに励みになりましたね。

2008年サマルカンド文化歴史博物館で個展（現地新聞記事）





写真教室アルトフォーカス

写真家・秋野深による個人運営の写真教室です。都内にて、主に一眼レフ、ミラーレス一眼ユーザー向けの講座、撮影会などを開催しています。土日または平日夜開催で、テーマ別に1~3回で終了する講座が中心です。

ウェブサイト：<http://www.alt-focus.com>
Facebook：<https://www.facebook.com/altfocusphoto>
お問合せ：alt-focus@alt-focus.com

シニアのための写真教室アルトプリズム

2015年から本格始動したシニアのための写真教室です。平日午前中〜夕方開催で、基礎からゆっくりと進めていきます。

ウェブサイト：<http://www.alt-prism.com>
問合せ：ap@alt-prism.com

秋野 深(Jin Akino)

1970年生まれ。福岡県出身。会社勤務の後、写真家・執筆家に転身。アジアやアメリカの自然風景、建築物、人々の生活や文化、日本の東北地方(鳥海山麓)の自然を撮影。クラブツーリズム海外国内撮影ツアー同行講師、写真講座講師。地方自治体への地域活性化事業への参画など多方面で活動。JATA世界旅行博2008、JATA旅博 2011(於：東京ビッグサイト)にて講演。2008年、ウズベキスタンの文化歴史博物館にて「独立17周年記念展示 秋野深写真展」を開催。2012年、NHK BSプレミアム『極上美の饗宴』の「シリーズ平山郁夫の挑戦(1)執念のシルクロード」にゲストナビゲーターとして出演。2014年、第7回タシケント国際フォトビエンナーレ(ウズベキスタン)招待作家。近著『はじめてのイラン紀行 ラーハな時に身をゆだね』をアマゾンKindleより電子出版。

ウェブサイト：<http://www.jinakino.com>
Facebook：<https://www.facebook.com/jinakinophoto>

タシケント国際フォトビエンナーレ2014に招待参加。会期中のインタビュー、各国写真家との交流などが今後の大きな刺激に。

まだ知られていない自然風景を世に

— どんどん表現の場を広げていらっしゃいますが、今後の夢はありますか？

秋野 これまでは世界遺産の町が多かったのですが、最近はまだ知られていない山岳部など自然豊かな地域へも積極的に行っています。時間をかけて何度も行くうちに、そうした地域のことも少しずつわかってきましたので。ゆくゆくは、ウズベキスタンの自然風景をテーマにした展示もしたいと思っています。

— いいですね。ウズベキスタンの美しい風景もぜひ見てみたいものです。

秋野 山岳部には外国人と初めて接するような人たちもいるわけで、「日本から来た」と言うと「日本みたいな海に囲まれた国は怖くて住めない」と言われたこともあります(笑)。

— 海を見たことがない人からしたら「恐怖」でしかないかもしれません。

秋野 ウズベキスタンというとよく「危なくないんですか？」ときかれますが、逆から見れば日本も安全そうだとはいってない人もいます。先入観だけだと、お互い様みたいなもので、人が抱く「危険なイメージ」はそんなものだったりするんですよ。

「撮影」がなくても会いたい人がいる

— 愚問かもしれませんが、何回もウズベキスタンを訪れるモチベーションは何でしょう？

秋野 やはり行く度に人間関係が広がり深まっていくこと・・・結局はそれが大きいと思います。自分だったらできないと思うほど親切にしてくれたことへの感謝とか、出会った頃は20代だった友人が30代になって家庭を持ちその家族と交流したり、そんな体験が積み重なるとつれ、世界遺産がどうこうではなく、今後も用があってもなくても行くだろうなあと思いますね。また仕事をしていく中で、生まれたときから混沌とした社会で生きている人たちから学ぶところもあると思っています。日本では触れられない複雑な社会の中で人の生き様を目の当たりにするというのも、最初の訪問から変わらない魅力ですね。

— これほどまでウズベキスタンに通じていらっしゃるのに「何回行っても知らないことばかり」「ご縁のままに撮り続けたい」との言葉に、この先どんなウズベキスタンを見せていただけるのだろうとワクワクしてきました。今後の展開を楽しみにしています。

聞き手：山本 玲子、岸田 恵利子
文：山本 玲子

アルトフォーカスからのお知らせ

■第8回受講生作品展が開催されます！

毎年恒例のアルトフォーカス最大のイベント、受講生作品展の会期が決定しました。今回は第8回でアルトフォーカスの10周年記念にもあたります。

有志の受講生と講師の計18名による、約70作品の展示を予定しています。前回からはフォトブックの展示も始めました。第8回もぜひお楽しみに。

写真教室アルトフォーカス10周年記念

第8回受講生作品展

会期：2016年2月3日(水)～7日(日)

会場：目黒区美術館区民ギャラリーB1FA面

協賛：株式会社ケンコー



第7回作品展の様子

講師・秋野深からのお知らせ

■島根県益田市で第2回景観フィールドワーク講座

今年から島根県西部・益田市の景観計画事業に写真家として参画しています。日本一の水質を誇る高津川があり、津和野や山口の萩も近いところです。7月に続き、11月29日に「益田市景観フィールドワーク講座第2回七尾地区」が開催され、市民の皆様へ地元の景観の新たな魅力を発見していただくための講座と撮影会を実施しました。2016年2月開催の景観シンポジウムでは、2015年の活動報告講演を予定しています。

■世界遺産・富岡製糸場で写真展と講演会開催

群馬県富岡市の富岡製糸場での「ウズベキスタン展～シルクで栄えた文化～」の一環で秋野深写真展「ウズベキスタン・世界遺産4都市に溢れる建築美」が開催中です。合わせて、中央アジアの一大シルク生産地であるウズベキスタン東部マルギランのシルク工房の写真も展示しています。

日程：2015年12月5日(土)～2016年1月17日(日)

12月12日(土)には、「写真家が語るウズベキスタンの魅力」と題して講演会が、その後ギャラリートークが開催されました。



ギャラリートークの様子

■ディノスショッピングサイトで連載中

カタログ通販ディノスのオンラインショッピングサイトにて「写真家・秋野深のやさしい旅のフォトレッスン」を連載中です。2016年1月には連載3年目に突入です！これまでとは少し趣向を変えながらも、やさしい旅の撮影のワンポイントレッスンが続きます！

★レッスン26:イルミネーションを強くぼかした幻想的な写真に挑戦してみよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson26/

★レッスン25:ホワイトバランスの機能を使って紅葉を色彩豊かに表現しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson25/

★レッスン24:時にはモノクロ写真で旅先の風情を上手に表現してみよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson24/

★レッスン23:影を上手にいかして撮影してみよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson23/

Alt-Focus GRAPH 第7号スタッフ

山田祥子 (取材・執筆・レイアウト)

暖冬過ぎて、都内では春物売り場に代わっていました。九州では既に雪が降ったそうです。季節ならではの被写体をいつ撮りに行くか、予定が難しい今日この頃ですね。

山本玲子 (取材・執筆)

今年を漢字一文字で表すと「動」。引っ越しのほか旅行も多かった1年でした。近所散歩を楽しむための引っ越しでしたので、来年はご近所開拓にいそしみたいと思います。

岸田恵利子 (撮影)

「あの受講生に会いたい」で今回は神代さんの顔写真を撮らせていただきました。素顔にふれ、今回の受講生作品展でお会いできることが楽しみになりました。

秋野深 (監修)

アルトフォーカスも設立10年目。あっという間のように、やはり短い期間ではないことも実感します。教室の形式や方針を改めて見直す節目の年にしたいものです。

表紙写真：「ラインのある風景」 西岡さと子

階段のラインと木目の複雑さが醸し出す情景が、無機質さと同時に奥行きも感じさせる作品。

Alt-Focus GRAPH 第7号
発行：写真教室アルトフォーカス
発行日：2015年12月25日

<http://www.alt-focus.com>
alt-focus@alt-focus.com